

祖先をいかに記憶するか---家屋と儀礼---

上田信（立教大学文学部）

はじめに

歴史学の研究が、一般に文字化された「史料」に基づき、史料批判という手続きを経て「確からしさ」を検討した上で、過去の「事実」を再構成する。筆者は、歴史学の教育を受けたものの、フィールドワークに基づく社会人類学的な研究も行った。その経験のなかで、文字化されない記憶が極めて重要であること、歴史事象を分析するときには文字資料以外の記憶の媒体を扱う必要があることを痛感した。その成果に基づき、いまを生活している人々が、過去に関する記憶をどのように読みとり、それを使ってどのように行為するかについて考察したい。本稿では、1998年に行った浙江省義烏市崇山村におけるフィールドワークを素材としてみたい。

崇山村における調査では、おもに1940年代の村の状況について明確な記憶を持っている高齢者から話を伺うことが多かった。現在の崇山村には、高齢者があつまる「老人之家」がある。すでに退職し第一線を退いた老人たちが集まり、談話したり麻雀をしたりする場である。私たちも、しばしばこの「老人之家」に赴き、聞き取りを行なった。

「老人之家」で調査を進めてよかったと思うのは、村人の関心事が分かるということである。話が輩字に及ぶと、周りで聞き耳を立てていた老人たちが、一斉に話に割り込んでくる。自分の輩字がなんであるか、どの祖先が偉かったか議論しはじめる。ときには互いの主張は相容れないものがあるらしく、大声で相手をやりこめようとする。

輩字について私が尋ねたことが契機となり、王姓の一族の歴史を記した族譜から自分の系列の祖先の部分を抜き出したものや、写しをどこからか持ち出し、ああたこうだと議論する始末。文化大革命のときに族譜は封建的だとされ、焼かれたと言われているが、自分の祖先の部分だけは、切り取って保存していたようである。こっそりと持っているものも含めて、そのすべてを持ち寄れば、丸ごと一冊の族譜が復元できるのではないかと思われるほど、村人の祖先に対する思いは強い。ただ、ハチの巣をつついたような状況になり、聞き取りを進めるには、大声を張り上げなければならなかった。

崇山村の王姓の場合、村が成立する以前に輩字があらかじめ決められていた。崇山村に関わる〈輩字〉を掲げておこう。

……昇進佑成応、尚悌相炎奎、鉅濟模 載、銓鍾茂煥基、晋瑞理貫通……

私が崇山村を調査したときに生存している村人は、「茂」字から「通」字までの世代に含まれる。

1. フィールドワークから①～祠堂と家屋～

祠堂

買い物客でどったがえしている江湾鎮を抜け、町並みが途切れると道は緩やかな登りとなる。小さな峠を越えると、そこはすでに崇山村の村域である。東陽江がゆったりと流れているさまを、のぞむことができる。そこから脇道に入り数十メートル歩いてゆくと、白壁の家屋群に足を踏み入れることになる。崇山村が細菌戦の被害を受ける前、レンガ造りの壁に漆喰をぬり、黒瓦を乗せた家屋は、よそ者の侵入を拒むようにそびえていた(図1)。

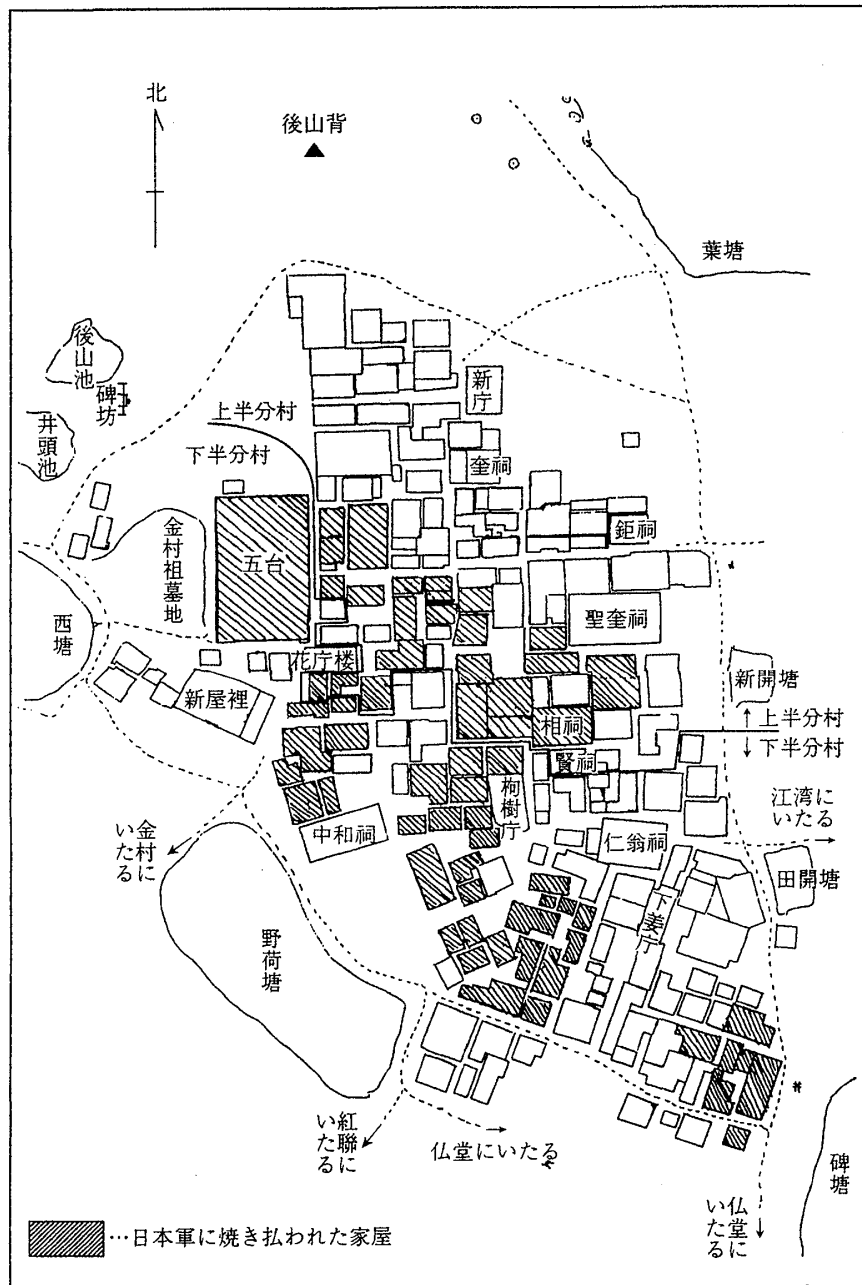


図1 崇山村

崇山村のような単姓村では、一族の歴史が村の姿にそのまま投影されている。村を開いた王成七十二、上半分村・下半分村と村域を二分した兄弟など、太公になることのできた祖先をそれぞれ祭る〈祠堂〉が、村内の各所に置かれているのである。地図に見える花庁楼は王成七十二、中和堂は下半分村の始祖である「応」字輩の兄を、聚奎祠は上半分村の始祖である弟を、それぞれまつる祠堂である。中和堂は現在、村の老人の集会所として使われ、入り口には「老人之家」の看板が懸かっている。

上半分村では時代が下るとともに、さらにいくつかの下位集団が形成され、それぞれの始祖が松樹庁、相祠などにまつられるようになった。「尚」字輩の祖先をまつる松樹庁は日本軍の手によって焼き払われ、いまでは見る事ができないが、家屋に松材がふんだんに使用された壮麗な造りであったという。他方、下半分村には「尚」字輩の祖先をまつる仁翁祠や下姜庁、枸樹庁などがある

崇山村を訪れたとき、村の中を歩くことができた。道は家屋の隙間を縫うようにして迷路のように連なっている。両側は二階建ての白壁で、道幅はところによっては大人二人が肩を触れ合わせなければすれ違えられないほどに、狭い。

聞き取り調査をしていた「老人之家」を出て村の西の縁を北上して、まずは崇山村の開祖・王姓七十二をまつる花庁楼。いまは人が住んでいるが、管理が悪くぼろぼろになってはいるものの、建物の木材は太く、棟木には彫刻が施されており、祠堂としての風格をкаろうじて留めている。

さらに家屋のすきまを縫って歩いて行くと、日本軍によって焼かれてしまった松樹庁の跡地に出る。跡地の一部には民家が造られているが、大部分は広場として残されている。かつては祖先祭祀の際に演劇を上演する舞台もあったという。

上半分村の中心であると目される聚奎祠。ここはすでに崩れかけている。梁や軒は手の込んだものではあるが、解放後には倉庫として使われたり、養豚場となったりと、ほとんど維持管理が行われていなかった。

次いで下半分村の仁翁祠。ここも荒れている。その次に足を延ばした下姜庁は人家となったために、比較的保存状態がよい。石に刻まれた対聯には、「世徳並崇山積厚、派源来曲水流長」とある。崇山と曲水という王姓の居住地を詠み込んだ対聯だ。

最後に足を踏み入れたのは枸樹庁。ここはブタの飼育が行われ、建物は屋根も崩れ落ち、梁もシロアリのためにスカスカになっていた。

かつてこれらの祠堂は、王姓の人々の誇りであった。現在は朽ちかけてはいるが、伝統的な江南風の家屋であり、中庭には手の込んだ石畳が敷き詰められ、梁や軒には木彫が施されている。現在、かろうじてペスト流行以前の風格を残している祠堂は、「老人之家」として使われている中和祠であるが、その柱に使われている木材の太さを見るだけで、いかに多くの資産を投入して建てられたか、想像するにあまりある。

家屋

一つの家屋のなかに住んでいる世帯は、基本的にその家屋を建てた人物の子孫である。村の人は家族のために家を建てるのではなく、数世輩下の子孫の世帯もそこに住まうことを考えるものであった。子孫に住まいを残すことで、太公となることができる。中庭を中心に多くの〈房〉と呼ばれる居室を設け、子の世輩には数室ずつ割り当て、孫の世輩なるとそれぞれの親が割り当てられた房をまた分割する。世輩が下り、子孫の世帯の数が増し

てくると、ついには一つの房に一つの世帯が入る。

一つの家屋に住んでいるからといって、子孫たちが共同生活を営んでいるわけではない。食事を作る竈は各世帯にあり、食事時になるといっせいに食材を炒める煙が煙突から立ち上ることになる。子どもだけが世帯の相違などあまり気にせずに、従兄弟・従姉妹同士で遊んではいるが、狭いところにひしめいているので、ささいなことで世帯のあいだで対立が生まれることもあったであろう。

村の西のはずれに建てられた新屋裡の様子を一つの例として見てみよう（図2）。

新屋裡は、「載」字輩の祖先が建てたもの。族譜などの資料がないために、建てられた時期は明らかにできなかったが、おそらくいまから一五〇年ほどまえ、清代の後期であろう。その祖先は、新屋裡の北側にある五台と呼ばれる家屋にもともと住んでいた。資産を築いた祖先は、五台がすでに手狭になっていたのを、新たな家屋を建てようとしたらしい。こうして建てた新屋裡に、二〇の部屋を設け、三人の息子に部屋を分け与えた。

新屋裡を建てた人物は、吹き抜けのある中庭に面した中央の居室に住み、北側の中央の部屋を〈公堂〉として祖先の位牌を安置した。息子たちは、傍らの部屋にその家族とともに住んだ。こうした息子たちの家族が住む部屋のことを、古くから房と呼ぶ。これは文字を分解すると明らかになる。「房」は部屋の入り口を意味する「戸」と、傍らにいつすることを示す「方」とに分解できるからである。

新屋裡を建てた人物を共通の祖先と仰ぐ同族集団は、この家屋のなかで育まれる。その人物の息子からはじまる子孫は、それぞれその新屋裡の同族集団の下位集団を構成することになる。一つの同族集団のなかの下位集団は、房と呼ばれる。

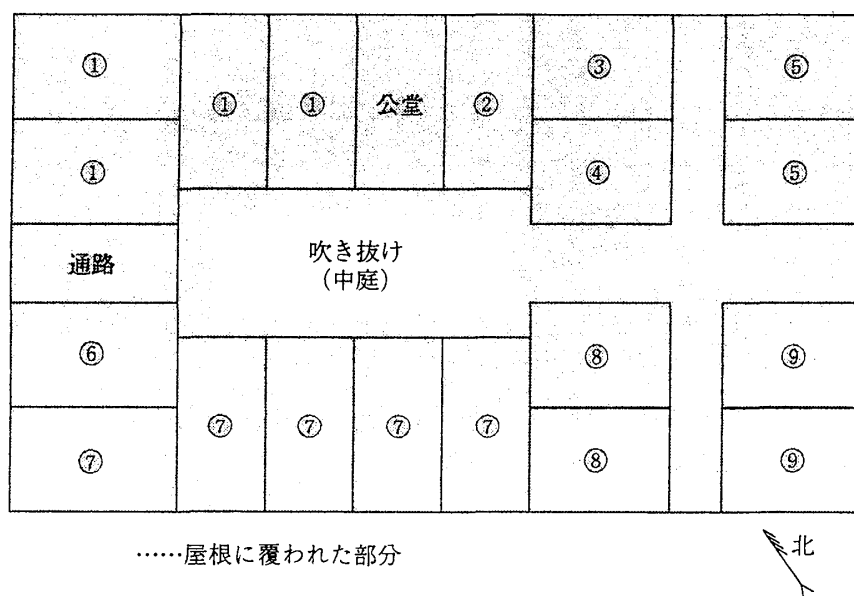
三人の息子は長男から順番に、一房・二房・三房と呼ばれた。ただ、長男の子孫はのちに途絶したので、ペスト流行当時に、この新屋裡に住んでいたのは二房と三房に属する人々であった。総計一世帯、老若とりまぜて三四人が、ひしめくように住んでいたことになる。

図2はペスト流行直前の新屋裡の状況を示したものの、ちょうど中央に位置する公堂には、新屋裡を建てた人物の祖父に当たる「模」字輩の祖先がまつられている。

祖先への巡礼

正月になると、この公堂に新屋裡に住む人々に直接関わる祖先の画像を掲げるのだと、少女時代を新屋裡ですごした王景雲さんが語ってくれた。年が新しくなると、まだ太陽が出る前に父親に連れられて、祖先に年始回りの挨拶をする。このとき母親は、王姓の子孫ではないから家に残る。最初に花庁楼に赴き、この村を開いた王成七十二をまつ。次いで中和祠さらに仁翁祠と、五、六カ所の祠堂に行き、王景雲さんの家族につながる祖先に礼拝し、最後に新屋裡の公堂で家族の住まいを整えてくれた祖先に詣で線香を焚く。

祖先の画像のテーブルには、菓子やくだもの、チマキやマントウ、餅などが並べられている。祖先たちは死後の世界で調理することもできるので、料理された肉などは置かなかったが、とても華やかだったと、王景雲さんは少女時代を思い出したのか、目を細めながら話しを続ける。お参りに行くと、豚の角煮を挟んだマントウを渡され、それが楽しみだった。新しい服を着て、新屋裡に住む同世代の子どもたちとなわとびをしたり、銅銭のおもしにニワトリの羽を付けたものをどれだけ長く蹴り続けられるか競い合ったりしたものという。



世帯番号	世帯主の名	家族人数	ペストによる死者
①	王満芝	7	2
②	王善行	2	
③	王友芝	?	
④	王景松	5	1
⑤	王増禄	?	
⑥	王善延	3	
⑦	王文権	3	2
⑧	王彩芝	4	
⑨	王継渭	?	

図2 新屋裡の状況

2. 「記憶」の装置としての家屋

意味づけられた空間（イーファー・トゥァンの用語を用いるならば「場所」）も、情報流の媒介となる。トゥァンは興味深い例を挙げている。親に幼少の頃から「机の東側の椅子を南に移してちょうだい」というように、常に東西南北の方位でしつけられていた少年が、方位を示す手がかりがまったくないところでも、正確に方位を察知できるようになったという。この事例は中国のものではないが、天津出身のトゥァンの念頭にあったものは、中国での方位に対する意味づけと場所との関係であったと思われる。

朱熹に仮託されている『家礼』には、次のような記述が見られる。「冠礼。……賓客が至り、主人が迎え、堂に昇る。賓客はその子弟のなかから礼を習得したものを選び賛冠者とする。ともに正装して門外に至ると、東面して立つ。……主人は門を出て、左に回り、西を向いて賓客に再拝する。……〔賓客は〕階段まだ来たら介添えに対して拱く。主人は階（きざはし）を先に昇り、やや東に進んで西に向かう。賓客は西の階段から続いて昇り、やや西に進んで東を向く」。『家礼』では冠婚葬祭の儀礼を、方位と階（きざはし）の高低とで示している。儀礼が行われる祠堂もまた、方位の軸に合わせて建てられる。

いわば儀礼の意味づけに従って空間の高低・方位が意味づけられる。意味づけられた空間のなかで儀礼を進めることで、たとえば上位のものは北を背にして南に面して座るといった秩序を身につけていく。秩序を身につけた人々は、たとえば儀礼を行う空間を方位軸に合わせて建てる。こうして意味づけられた空間は結晶化し、一個のテキストとして身体を介して読みとられるものとなるのである。

3. フィールドワークから②～祖先と太公～ 太公

人は死ぬと祖先となる。中国人の多くは、死後に自分の子孫たちが供養を行い、祖先祭祀の線香の煙が絶えないことを願っている。しかし、ほとんどの祖先たちは、死後、ときが経過し、その人のことを記憶している子孫が鬼門に入るとともに、忘れ去られてしまう。族譜などにかろうじて名が残るだけで、墓に詣でるものもなく、位牌の前で線香や紙銭を焚いてくれるものもない。墓が朽ちて行くとともに、現世における痕跡も消滅する。

他方、子孫が生きる限り半永久的に祀り続けられる祖先もある。王成七十二のように村落の始祖となった祖先、あるいは上半分村・下半分村のそれぞれの開祖となった祖先は、死後五百年以上の年月を経ているにもかかわらず、毎年、正月や冬至の時期に、多くの子孫が詣でてくれる。このような半永久的に記憶される祖先を、崇山村では〈太公〉と呼ぶ。太公になるための条件は、子孫のために生活のより所を残すことである。王成七十二は崇山村という村を創立し、生活の根底を用意してくれた。彼の息子は村域を区分けし、それぞれの子孫の住まう場所を確定してくれた。そのために、それぞれ子孫から太公として尊敬され、記憶され、祭祀を執り行ってもらえる。

もう一つ、太公となる方法は、子孫が代々と住み続けられるほどの大きな家屋を建てることである。大きな家屋を設けた人物も、その家屋に住む子孫から感謝を受け、家屋のなかで位牌が置かれた部屋において礼拝を受けることができる。また、子孫のために資産を

作り、それを共有財産とすることでも、太公となることができた。

村の資産

崇山村の村人を近隣の住民は、次のような言葉でからかったという。

崇山儂、脚里 起半隻、

后面跟担柴、手里挽隻籃

〈儂〉は「奴ら」とか「連中」といった意味合い。訳してみると「崇山村の連中は、歩くときには靴をつっかけ、うしろに柴を担ぐ下男を連れ、手にはかごをぶらぶら提げるだけ」とでもなろう。つまり崇山村の村人は、身体を動かさず、荷物は人に運ばせて、重いものは手かごぐらいしか持ち上げないという内容である。

王姓同族集団の発展とともに歴史を歩んできた崇山村は、太公たちが蓄えた資産を背景にして、義烏県でも有力な村として知られていた。村には耕地がほとんどない。しかし、太公が購入し、太公の名義となっていたり、太公を祀る祠堂（後述）の名義となっていたりする土地が多い。そこから上がる小作料は、村を潤した。

村人自身が所有する耕地は〈実田〉と呼ぶのに対し、祠堂などの名義となり小作人が耕す耕地は〈太公田〉、あるいは〈客田〉と呼ばれる。崇山村は、太公田のほうが実田よりも圧倒的に多い村であった。崇山村のゆとりのある生活は、太公が子孫のために残してくれた資産に由来する。農業を営む村人の多くが、太公田を借りて小作していた。

房頭

太公に対してその子孫たちは、祭祀を続ける義務を果たさなければならない。祀り続けることで、子孫たちは太公が遺してくれた家屋に住み、太公田から上がる小作料を享受することができるのである。太公を祀る子孫は、〈房頭〉と呼ばれるグループに組織される。太公の息子が初代の房頭。三人の息子がいれば、三つの房頭ができる。息子も死去すると、それぞれの息子の子孫が房頭を編成する。

房頭という言葉は、村人との聞き取りのなかでしばしば出てくるのだが、なかなか理解しにくかった。それは固定的な組織ではないためである。太公のそれぞれについて房頭が編成されるところに、この概念のポイントがある。したがってその時々で話題になっている太公が異なれば、房頭の範囲も異なることになる。また、一人の村人がいくつかの房頭に属することが一般的である。

太公を祀る各祠堂には〈理事〉と呼ばれる役職あり、客田などの資産を管理し、小作料の督促や徴収、正月や清明節、冬至などのときに行われる祭祀の進行を司った。太公に対する各房頭から一人ずつ〈甲長〉と呼ばれる代表者が選出され、この甲長が協議して資産管理能力などの秀でた人物を理事として委託するのである。

理事になるには年齢や世代で決まるのではなく、まさに実力本位。任期はだいたい三年だが、資産運用などで失策があったり、予期したほどの能力がないと分かたりしたさいには、罷免されることもあった。理事は必要に応じて会計係や管理人を置き、日常的な業務を担当させた。

太公たちが買い集めた太公田からは、毎年、多くの小作料が祠堂に集まる。この収入を運用して生まれた資金は、太公に対する祭祀や祠堂の増改築に充てられる一方で、子孫に対する教育にもまわされた。先にみた新屋裡での生活でも、学校に通う子弟に対して、学業を奨励する観点から肉が振る舞われているが、実際に奨学金を支給する事例もあった。

小学校を卒業した子弟に池で養殖している魚を配ったり、官職を獲得したものに土地を与えたりすることもあった。

祠堂のなかには太公田の収益を基金にして、それぞれ一人の教師を雇い、私塾を開設しているものが二つあった。現在の小学校低学年に相当する学齢の子どもたちが、女の子を含めてこの私塾で読み書きを学んでいた。

小学校高学年になると何人かの子どもは、崇山村からさほど遠くはない江湾鎮にある曲水小学校に通う。村外に進学した子弟には、多少ではあるが補助金が出た。さらに優秀であれば奨学金を出し、杭州の高等教育機関に進学させる。なかには上海の大学に入学させてもらったものもいた。こうした子弟のなかからは、国民政府のもとで裁判官となり、上海で活躍したもの現れた。優秀な人材を輩出したこと、これが崇山村のプライドを強いものにしたのである。

おわりに

家屋と村域という空間そのものが一つの家系記録であるという視点から、議論を進めてきた。家系記録とは一つの情報の流れである。この情報流は、現実生きる人々の行為を強く規制する。家系記録の存在は、記録に関わる人格のあいだの相互の関係に影響を及ぼす。たとえば2個の人格が出会ったときに、あらかじめ関係が定められたように振る舞うのはなぜか。この点を明らかにするためには、人格のレベルに情報流がどのように作用するのかを検討する必要がある。

情報流は、いくつかのレベルに分類することが可能である。一つは日常生活のレベルであり、当事者は相互のやり取りのなかで、意味の表出と了解を行う。相互のあいだの情報流は、順当に進むとは限らず、誤解やねじれを含む。やり取りのなかで、互いに修正を加え続け、日常生活に差し支えないと判断したときに一区切りをつける。私たちが母語を習得するときには、こうした日常レベルの情報流に身を置く。

第二のレベルは儀礼・口承・稽古である。儀礼などは以前の意味生成のプロセスが再現されることを目的として行われる。したがって伝達する側、あるいは継承する側が空間と時間とを共有し、手本を示し、それをまねるというスタイルで伝承が行われ、伝達する側は自らが教えられたとおりに教えようと努め、継承する側が勝手に変更することは許されない。儀礼は世代のあいだで伝承されるために、年中行事として毎年繰り返されるもの、あるいは遷宮のように二〇年に一回というサイクルで一巡するものなどと期間はさまざまではあるが、多くの場合、世代の幅よりも短い期間に繰り返される。祭礼などに立ち会ったとき、私たちは儀礼を観察していると思っているが、本当は儀礼が継承されているプロセスを見ているというべきであろう。また、一つの儀礼が共有されていることを前提にして、あえて本来の手順から逸脱し、儀礼本来の意味とは異なる意味をそこに盛り込もうとすることもある（拙稿「そこにある死体——事件理解の方法——」『東洋文化』第七六号、一九九六年を参照のこと）。

芸能など伝承も伝達者と継承者とが会して、稽古を行うなかで達成される。もちろん、伝承が完全に行われることは難しく、変容したり継承者がアドリブを付けたりしてきた。古くから連綿として受け継がれてきたといわれる祭礼や芸能も、実際には変化を遂げていると考えるべきであろう。

第三のレベルは記録のレベルである。文字や楽譜・図像、あるいはレコードやビデオなどの媒体を用いて、発信者が情報を凍結し、保存可能な形にしたものが記録である。ただし記録は受信者に解凍されなければ読みとられることはない。記録は凍結・解凍されるときに、意味の生成の契機を私たちに与えるのである。発信者が記録した情報を受信者が完全に正確に受容するとは限らないことは、たとえば一つの詩の解釈が、時代によって、鑑賞者によってさまざまであることを思い起こせば、容易に理解できるであろう。

中国で家譜・宗譜・族譜などと呼ばれる家系記録は、第三のレベルに属する情報流である。家系記録の多くが族人の人名を列挙した部分に割かれ、親族関係や人口史のデータとして家系記録を利用する研究者を例外とすれば、これらの膨大な家系記録は第三者にとって、ほとんど意味を持たない。この記録が実際の生活に影響を与えるプロセスを理解するためには、家系記録を当事者たちが解凍する手続きを解明する必要がある。

本稿では家系記録を解凍する手続きを、日常レベルにおいては輩字について言及した。当事者たちは自らの名に刻まれた輩字を手がかりに、家系記録を読みとろうとする。この作業は、自己と同じ輩字を家系記録から探しだし、その輩字が世代の順番において占める順位を確認し、直接に接する他者の輩字と比較して、共通の祖先を起点とする序列のなかで尊卑を確定するという手続きをとる。

儀礼レベルにおいては、村域や家屋を媒介として家系記録が解凍される。生活空間が有する構造と家系記録とが対比され、村域を確定したり、家屋を建築したりした人物が太公として認識される。この手続きを経て、過去の人格のなかから儀礼の対象として誰を選び出すかが明らかにされるのである。人々は各地に分散した祠堂や墳墓を巡礼することで、祖先と自己との関係性を確認する。また儀礼空間として祠堂や家屋を建設することで、儀礼のあり方を規定する。一部の家系記録は、『朱子家礼』などを採り入れて、儀礼のマニュアルを書き込むことで、より強固に空間の性格づけを行う。家系記録の編纂者たちは、生活の場にオーソドックスな儀礼を持ち込むという役割を果たしたのである。

結論を出すならば、家系記録は生活空間において読まれることで、はじめて文字や図像のなかに凍結されている情報を解凍することができるということになるであろう。

【参考文献】

- イーファー・トゥアン著、山本浩訳『空間の経験：身体から都市へ』筑摩書房、1988年
上田信「史的システム論と情報流」(神奈川大学中国語学科編『中国民衆史への視座』東方書店、1998年)
上田信「危機状況下の同族集団－浙江省の同姓村における細菌戦被害を通して」(吉原和男・鈴木正崇・末成道男編『〈血縁〉の再構築：東アジアにおける父系出自と同姓結合』風響社、2000年)